

「子どもの心のはだ」によせて

下山田裕彦

久しぶりに倉橋惣三の文章を読んだ。われを忘れて倉橋を読んだ30代、40代のころが鮮明に思い出される。当時、私は倉橋と同時に、矢内原忠雄全集にも夢中になっていた。

学生時代、矢内原の聖書講義を聴いた私は、倉橋から学ぶ幼児教育の思想と矢内原の福音信仰に基づく人間理解を重ね合わせて思索を巡らせた。両者は、時に火花を散らしながら、私のその後の歩みを導き、方向づけてくれた。

倉橋について文章も書き、学会発表もして、批判も、恥ずかしながらしてきた。三十年以上の年月が流れ、幼児の教育に携わる研究者としての最晩年を迎え、いま、倉橋の人と思想について、再検討を迫られているようである。

倉橋の幼な子に対する見方は、やわらかく、温かく、詩のような讃歌である。

私はいま、勤めている大学の附属幼稚園を、毎週

一回訪れて、子どもの傍で過ごす時を、この上なく楽しみにしている。

学会などで留守した後のこと、園に行くと、五歳児の女児が笑顔で、そして、少しすました声で、声をかけてくれた。

「下山田先生、おひさしぶりですね」。

この大人びたあいさつに、少々ぼつとして、

「本当におひさしぶりですね」と、このレデイに応えた時、「子どもの心のはだ」の文章が思い出された。

幼稚園の子どもたちは、おしゃまさんでもはにかみやさんでも、元気よすぎてやんちゃでも、みな、一様に愛らしい。やわらかな肌と、人を信頼する清らかな瞳をもっている。

若き日の倉橋は、内村鑑三の名著『後世への最大遺物』を読んで感激し、内村のもとで熱心に聖書を学び、信仰を継承し、師・内村からも周りからも、

愛弟子と称された。

信仰者・倉橋の子ども理解は、次の聖書の箇所に原点をもつのではなからうか。

「イエスにさわっていたために、人々が幼な子らを見もとに連れてきた。ところが、弟子たちは彼らをたしなめた。それを見てイエスは憤り、彼らに言われた。

『幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である。よく聞いておのがよい。だれでも幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない』。

そして彼らを抱き、手をその上において祝福された。」

(マルコによる福音書 10章13節〜16節)

そしてこのメッセージには、倉橋が、幼な子の心に向かい合つて、恥じ入り、自らを戒めた大人の心がある。旧態依然として、道徳や作法を金科玉条にしている、大人、とりわけ、子どもを導き、育てる、先生と呼ばれる私たち大人は襟を正さざるを得ない。

さらに若き倉橋に感化を与えたのは、ペスタロッチの教育思想であつた。社会からはじき出されて、恵まれない貧しい子どもたちの教育に生涯を捧げたペスタロッチは、挫折とかなしみ多き人であつた。彼の処女作『隠者の夕暮』の副題には次のような言葉が付与されている。

「神の親ごころ、人間の子ごころ。

君主の親ごころ、国民の子ごころ。

それがすべてのしあわせのもと。^{註1}」

『幼児の教育』第一〇九巻第七号には、このペスタ



ロッチの思想を平易な言葉で石塚美穂子氏が見事に浮き上がらせている。

ペスタロッチの教育思想は、倉橋を経て、今日まで細い糸のように継承されている、との思いに満たされる。

ペスタロッチにせよ、倉橋にせよ、いまは、現代という子どもをとりまく社会において、再検討され、子どもの幸せな成長のため益となつていかなくはならないだろう。

水曜日の朝、附属幼稚園に出かけていった。三歳児のM君が、一人で壁によりかかつて、何をするでもなくじつところを見ている。言葉が少々遅く、友達の中にとけこめない彼に私はずっと同情してい

た。ゆっくりと彼の方に近づいていってしばらく彼の横にしゃがみこんでいた。そして「あそぼう！」と声をかけ手を差し出すとM君はニコツと笑った。この瞬間、私たちの距離は近くなり滑らかになった。手をつないで、ゆっくりゆっくり保育室などへのぞきこんで歩いた。M君は不安がなくなつた、穏やかな表情であつた。彼の心のはだのやわらかさに触れた思いで忘れられない。それ以来、私の来るのを待っていてくれ、言葉もかけてくれるようになった。

さらに、一番長く奉職した静岡大学時代にも、やはり附属幼稚園で実習をさせてもらった。

若かつた当時の私は、新設の幼児教育教室を何とかよいものにしたと一生懸命であつた。幼稚園に九時に登園し、すぐに庭に出て子どもたちと遊んだ。男児たちの人気の遊びは野球であつた。

私はピッチャーで、子どもが打てるようにゆるい

球を投げるのが常だつた。それでもしかし、なかなか打てなかつた。そんな中に一人だけ、とび抜けてうまいK君がいた。打てないと「チツブだね」とねばつて打つ。ある日、彼がバッターに立つた時、私は思いきつてきつい球を投げた。K君は三振に打ちとられた。怒つたK君は私に文句を言つた後、突然私をどなつた。「何だ、おまえなんか先生じゃないだろう、帰れ！」と。私も負けずに「いいよ、帰るよ」とむきになつて言い返したのである。いつもみんなの頂点に立つていたK君のプライドはすっかり傷ついてしまった。若かつたとはいえ、まことに恥じるばかりである。

子どもにかかわる保育者は、どんな時にも、やわらかな子どもの心を傷つけてはならない。

また、子どもの心のはだ、について忘れられないA君との思い出もある。

昭和四〇（一九六五）年、家庭をもったばかりの

ころ、茨城県の海沿いの町から東京の大学に通っていた。総じてみな貧しい時代であった。A君一家は浜辺の掘っ立て小屋のような所に、子だくさんの家族で住んでいた。ドラム缶の風呂に流木を燃やして入っていて、A君は何の用もなくとも、通りがかり、という風情でわが家の小さな縁側に顔を見せた。破れたランニングシャツを着て、腕や両下肢には皮膚病か、虫に刺されたのか、ひどいおできがたくさんあった。妻が消毒して軟こうを塗ってやり、おやつと一緒に食べたりした。スイカを緑の皮を薄く残すまで食べた姿が忘れられない。毎夏、スイカの季節がくるたび、A君、その後どうしたろうかと話題にした。

とても、やわらかい肌、などではなかった。しかし、黒目がちで、はにかみながら、うれしそうに、おいしそうに食べる彼の心のはだはやわらかく、こ

ちらにも幸せな心持ちをわけてくれた。

倉橋は、後半では、それにしても、……と、大人の心に言及している。粗い、おしろいやけのした心で、子どものやわらかな心に接してよいのだろうか、との問いを出している。

倉橋が信仰の師と仰いだ内村鑑三は、人間の内奥にひそむ暗さ・罪について鋭く追求した。

そして、こんな短い詩を残している。

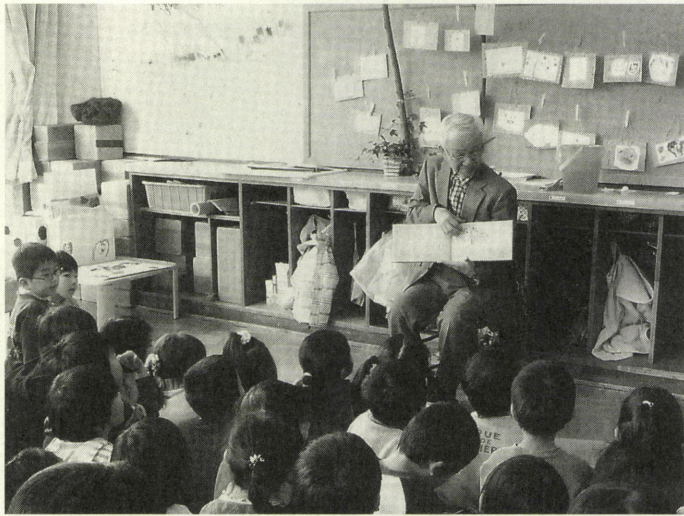
「さらばわれは何なるか

夜暗くして泣く赤子

光ほしさになく赤子

泣くよりほかにことばなし」^{注2}

やわらかな子どもの心に、暗い内面をもつ大人、保育者がかかわっていくことの厳肅さに畏れざるを



▲附属幼稚園の子どもたちと

得ない。

それでも私たちは、子どものやわらかさ、清さ、明るさに励まされ、軌を正して保育の営みを続けていく。

育ちゆく子どもに希望を見いだして、子どもの幸せを保障するために、働いていきたいと思う。来週の水曜日に幼稚園で読む絵本を選び、声を出して読む練習をしながら、子どもたちの顔を思い浮かべて、私は幸せな思いに満たされるのである。

(北陸学院大学教授)

注(引用文献)

- 1 ベスタロッチ『隠者の夕暮』(梅根悟訳『政治と教育』明治図書出版 一九八四年 所収)
- 2 山本泰次郎『内村鑑三・信仰・生涯・友情』

東海大学出版会 一九六六年